

# 第44回

# 全国中学生人権作文コンテスト 三重県大会入賞作文集



人権イメージキャラクター  
人KENあゆみちゃん



人権イメージキャラクター  
人KENまもる君

津地方法務局・三重県人権擁護委員連合会

## 世界人権宣言

第1条 すべての人間は、生れながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。人間は、理性と良心とを授けられており、互いに同胞の精神をもって行動しなければならない。

世界人権宣言は、1948年（昭和23年）12月10日、第3回国連総会において採択されたものであり、人権及び基本的自由を遵守し確保するために、すべての人民とすべての国が達成すべき共通の目標ないし基準を定めたものです。

第四十四回

全国中学生人権作文コンテスト  
三重県大会入賞作文集

津 地 方 法 務 局  
三重県人権擁護委員連合会

## は し が き

法務省と全国人権擁護委員連合会は、次代を担う中学生の皆さんが、日常の家庭生活や学校生活等の中で得た体験に基づく作文を書くことを通して、人権尊重の大切さや基本的人権についての理解を深め、豊かな人権感覚を身につけることを目的として、昭和五十六年度から毎年「全国中学生人権作文コンテスト」を実施しております。

これを受け、津地方法務局と三重県人権擁護委員連合会では、三重県教育委員会、中日新聞社、NHK津放送局、三重テレビ放送、伊勢新聞社の御後援を得て、四十四回目となる「全国中学生人権作文コンテスト三重県大会」を実施したところ、県内の一五〇校から三万三二七六編に上る作品が寄せられました。

応募された作品の内容は、「いじめを含む子どもに関する問題」を始めとして、「障がいのある人に関する問題」、「外国人の人権問題」、「性的マイノリティ」など多岐にわたっており、日々の学校生活や家庭の中などで起こっている身近な出来事を注意深く捉えたものや、人権問題を解決し、お互いがより快適に生活するにはどうしたらよいのかを深く考えたものなど、いずれの作品も中学生らしい感性に富み、純粋な感覚で人権問題を捉えたものばかりでした。

また、自分は今何ができるのかについて悩み、真剣に考え、そして知識や経験だけに頼らず、自分なりの答えを導き出していくその過程は、とても力強く、深く感銘を受けました。

この作文集は、「三重県大会」において最優秀賞及び優秀賞を受賞した作文を収録し紹介するものです。一人でも多くの方々に御愛読いただき、基本的人権を尊重する輪が更に大きく広がるよう願っております。

終わりに、この人権作文コンテストの実施に当たり、貴重な時間を費やし熱心に作品を書かれた中学生の皆さんを始め、御指導いただいた先生方、保護者の皆様、御協力を賜りました学校、各市町教育委員会、また、御支援をいただきました関係各方面の方々に心から感謝申し上げます。

令和八年一月

津 地 方 法 務 局 長 加 藤 和 孝

三重県人権擁護委員連合会会長 上 野 尚 子

# 目次

掲載頁

## 最優秀賞(三編)

(津地方法務局長賞)

見えない壁の向こう側……………松阪市立嬉野中学校三年 刀根 蓮 ……1

(三重県人権擁護委員連合会長賞)

夢は自由だ……………津市立東橋内中学校三年 スアレズ トミコ ……5

(三重県教育委員会教育長賞)

私に巡る多様性の証……………津市立東橋内中学校三年 メディナ アリアナ ……9

## 優秀賞(八編)

(中日新聞社賞)

「沈黙」の中にある勇氣と努力……………津市立東橋内中学校三年 田村 爽 ……13

ボランティア活動で知ったこと……………伊賀市立崇広中学校二年 井岡 雄大……………17

(NHK津放送局長賞)

私の事……………松阪市立殿町中学校三年 森川 陽月……………21

病気……………伊勢市立五十鈴中学校一年 (非公表)……………25

(三重テレビ放送賞)

寄り添う心……………津市立橋北中学校二年 栢原 咲羽……………29

エレベーター前での経験から考えたこと……………川越町立川越中学校三年 川村 佑里花……………33

(伊勢新聞社賞)

誰もが過ごしやすい社会へ……………津市立東橋内中学校二年 オオニシ イズミ……………37

私の弟……………四日市市立山手中学校三年 石崎 和貴……………41

奨励賞(九編の作品一覧)

写真集……………46

\*原文に忠実を原則にしましたが、誤字・脱字等については最小限の訂正をさせていただいたものもありますのでご了承ください。

○三重県大会 最優秀賞（津地方法務局長賞）

## 見えない壁の向こう側

松阪市立嬉野中学校 三年

刀 根 蓮

僕がまだ小学校に入る前、中国の北京にある母の実家で暮らしたことがある。その経験は、人権という言葉の意味を深く考えるきっかけとなった。

それまでの僕は、日本に住む普通の子どもだった。言葉の通じない場所で暮らすのは初めてだった。中国語はまったく聞き取れず、周囲の子どもたちが何を話しているのか全然わからなかった。ただ、そこに見えない壁があるような、僕だけが仲間はずれになっているような気配をずっと感じていた。

ある日、それまで一緒に遊んでくれた友達が突然僕を避け始めた。近づいてもそっぽを向かれ、遠くから指をさされて笑われたりした。なぜ避けられたのかわからず、胸が張り裂けそうだった。まるで僕だけが世界から切り離されたように感じた。

少し成長してから、その理由を知った。僕があ頃の話を母にすると、母は静かに語ってくれた。

「あの時、近所に日本人を嫌う子がいたの。昔、日本と中国は戦争をして、多くの中国の人が辛い思いをした。その記憶が今も残り、日本人に良い印象を持たない人もいるの。でも、それは蓮のせいじゃない、悪くないよ。」

それを聞いて僕は胸が苦しくなった。自分が何をしたわけでもないのに、日本人であることだけが理由で嫌われた。それがとても悲しかった。

母は続けて、こう教えてくれた。

「中国では、昔の戦争のことを学校で詳しく学ぶから、日本に対して複雑な思いを持ってしまう人もいるのよ。」

その言葉を聞いて、あの出来事に少しだけ理由を見つけた気がした。けれど、すぐに納得できるわけではなかった。

その後、再び中国を訪れたときのこと。記憶がよみがえり、ふとこんな考えが浮かんだ。

「もしかして中国の人たちは、日本人のことをよく思っていないのかもしれない。」

それでも、母や祖父母をはじめ、家族はみんな僕や父を大切にしてくれていた。だからこそ、そのことがうまく理解できず、心の中は混乱していた。その混乱の中で、相手の気持ちを知ろ

うとするより、自分を守ろうとして僕は心に壁を作ってしまった。話しかけられても素直に笑えず、目が合うと不安になった。知らないうちに、差別された傷が心に影を落とし、僕もまた中国の人たちを偏った目で見えるようになっていた。

そんな偏見に気づかせ、僕の中にあつた見えない壁を取り除いてくれたのは、母の中国人の友人だった。その人はいつも僕に優しく接してくれ、言葉が通じない僕に笑顔で話しかけてくれたり、美味しい料理を作ってくれたりした。ある日、僕は母に聞いた。

「どうしてあの人は、家族でもない日本人の僕にも優しくしてくれるの？」  
母は微笑んで言った。

「蓮のことを、日本人とか中国人とかじゃなく、大切な一人の人として見ているからよ。」  
その瞬間、自分が抱えていた大きな過ちに気づいた。僕は差別されたことを悔しく感じていたのに、いつの間にか自分も中国人に対して偏見を持ってしまっていた。見えない壁を作っていたのは僕自身だった。差別とは見た目や言葉の違いだけでなく、「どうせ〇〇だから」と決めつけてしまう気持ちの中にこそ存在するのだと気づいた。しかもそれは、自分でも気づかないうちに生まれてしまう。

日本で暮らす今、外国から来た人や異なる文化を持つ人を見ると、あの頃の記憶がよみがえる。友達が「〇〇人ってさ…」と何気なく言ったとき、それは本当に正しいのか。自分もまた、

壁を作っていないだろうか。そうやって、心の中で何度も問いかける。

これから先、もし日本語がうまく話せなかったり、周りとなじめずに困っている人がいたら、今度は僕がその人に歩み寄りたい。かつての自分がしてほしかったように、まずは笑顔で話しかけたい。そして、その人が心から自分はひとりじゃないと思えるよう、寄り添える人になりたい。

誰かの痛みにそっと寄り添うこと。それが人として見るということだと、今ならわかる気がする。大切なのは、国籍や言葉ではなく、その人の心を見ようとする姿勢だ。きつとそれが、人権を守る第一歩なのだと思う。僕はこれからも、人との違いを尊重し、どんな国の人も対等に接する人でありたい。そして、自分が味わった悲しさを、誰にも味わわせたくない。その思いを胸に、心の中の見えない壁を見つめながら、生きていきたい。

見えない壁とは、国と国の間だけでなく、人と人の心の中にもある。けれど、その向こう側には、理解や共感、友情がきつと待っている。勇気を出して一歩踏み出せば、その壁の向こうで助けを求めている誰かに、僕の手が届くはずだから。その瞬間、見えない壁はきつと消えて、光が未来を照らすだろう。

○三重県大会 最優秀賞 (三重県人権擁護委員連合会長賞)

## 夢は自由だ

津市立東橋内中学校 三年

スアレズ トミコ

「将来の夢はなんですか？」

そう聞かれたとき、どんな答えが返せるだろう。ケーキ屋さん、お医者さん、警察官……。幼いころの私は、どんな夢も自分の未来へとつながっていると信じていた。けれど、ある日、その道は私には最初から閉ざされていることを知った。

私はフィリピンで生まれ、三歳のときに日本に来た。家ではタガログ語を話し、学校では日本語で勉強し、友達と遊んだ。外国にルーツを持つ子どもが多い地域だったので、共に日本語を学びながら成長できた。だからこそ、日本での生活は自然で、私は「自分は日本人と同じ」と思っていた。

しかし、あるとき親戚のおじさんの言葉が私の心に突き刺さった。「将来、先生とか警察と

か公務員になりたいと思っっているなら、日本国籍を取らないと、なれないよ。」それは、初めて、自分には就けない職業があると知った瞬間だった。夢は自由に描けるものだと思っっていたのに、国籍という見えない壁によって可能性が制限されることを知り、胸の奥に重たい石が落ちた気がした。

中学生になってからは、進路の話題が増えた。母から「夢は決まった？」「高校はどうするの？」と繰り返し尋ねられる度に、私は「わからない」と答えるしかなかった。頭の中では、保育士、弁護士、ウエディングプランナー……いろんな私を思い描いた。けれど、「学校の先生になる私」だけは、モノクロのまま動かなかった。あの親戚のおじさんの言葉が、夢に色を塗る手を止めさせたからだ。

「私は日本人だったらよかったのに。」

そう思うことが増えていった。友達と同じように勉強し、部活をし、笑い合っているのに、なぜ私だけ道が閉ざされているのか。違いを意識するのが怖くて、フィリピンの文化を隠すようになった。誕生日パーティーも開かなくなり、タガログ語を教室で話すのも避けた。自分の中にある「外国人」というラベルを、必死に消そうとしていた。

そんな私の心を大きく揺さぶったのは、今年赴任してきた先生だった。

「私は韓国籍で在日コリアン三世です。」

学年集会でそう語った先生は、日本国籍がなくても先生になっていた。私は驚き、そして胸が熱くなった。モノクロだった「学校の先生になる私」のキャンバスに、一気に色が広がっていった。それは、夢は閉ざされたものではなく、描き直すことができるものだと思えたからだ。

さらに、人権学習でのクラスの意見交換は、私にとつて忘れられない時間となった。日本国籍がなければ就けない職業があることについて、様々な思いを聴くことができた。

「国籍を変えたくない。タイが好きだから。」と胸を張る友達。

「ここは日本だから、仕方がない。職業の選択が制限されるか、日本国籍を取るか、どちらかでしょ。」と語る友達。

「同じように勉強している仲間が好きな仕事に就けないのはおかしい」と寄り添ってくれる友達。

その一つひとつの言葉に、私は自分の立場と向き合い、揺れ動いた。「仕方がない」と飲み込もうとしていた気持ちに、「本当にそうだろうか」と問い返す勇気ももつた。

私は今、少しずつ自分を取り戻している。フィリピンから最近転校してきた友達と教室で笑いながら、一度は閉じ込めた「母語」を話せるようになった。隠さなくてもいいんだ、と心が温かくなった。勇気を出した私を「大丈夫だよ」と受け入れてくれた仲間がいる。

私はまだ「将来の夢」を決めきれではない。でも、夢を見ることが自分を諦めなくていいと

知った。閉ざされていると思っていた道の先にも、光はある。だから私は願う。夢を描く自由を誰からも奪わない社会を。国籍や背景に関わらず、一人ひとりが「なりたい自分」を堂々と描ける社会を。

どうか聞いてほしい。

もし、あなたの大切な友達が、夢を語った瞬間に「その道は君にはない」と言われたら、あなたはどうか感じるだろうか。

もし、あなたの子どもが、「仕方がない」という言葉で可能性を閉ざされたら、あなたは受け入れられるだろうか。

私たちは共に考えなければならない。夢を見ることの尊さを。違いを理由に奪われる未来の理不尽さを。そして、互いに寄り添いながら、夢をつなぐ社会をつくる責任を。

私は、この仲間たちと過ごす残りの中学校生活で、もっと自分を語り、互いを知りたい。そして高校でも、社会に出ても、夢を諦めずに描き続けたい。フィリピン人である自分を誇りに思いながら、日本で生きる自分を肯定しながら。

夢は自由だ。

そしてその自由を守るのは、私たち一人ひとりの心だと、私は信じている。

## 私に巡る多様性の証

津市立東橋内中学校 三年

メデイナ アリアナ

「他の国で生まれたから、この国から出ていけ。」

私は日本に住んでいてはいけないのでしょうか。こんな言葉を投げかけられた時、胸が締めつけられました。私はフィリピンで生まれ、小さいころに日本へ来ました。好きで来たのではなく、日本で一生懸命働く父と母と共に生きるために、この国に来たのです。

両親が日本で働くには条件があります。誰でも来られるわけではなく、私たちもその条件の中で暮らしています。だからこそ私は義務教育を受け、日本語も少しずつ話せるようになり、読み書きもできるようになってきました。気づけば日本語で夢を見ることもあるほど、生活は日本に根づいています。

私のルーツには日本もあります。高祖父母のどちらかが日本人で、その血を少しだけ受け継

いでいます。そのことを理由に、両親は日本で働くことを許され、私はこの国で学び、育っています。しかし、その日本のルーツをかえってからかわれることがあります。「日本の血があるのに、どうして日本語が下手なの？」と責められる。外国人の子には、「おまえは日本人だろ、あっち行け。」と言われる。心にナイフを突き立てられたようでした。

以前通っていた学校では、外国にルーツを持つ子はほとんどいませんでした。私は孤独でした。名前をからかわれることもありました。「アリアナ」という名前が、人気歌手と同じだからと笑われる。でも私はその人ではない。私自身を見て、私の名前を呼んでほしいと強く願いました。学校へ行くのが怖くなり、机に一人座っては「なぜ私はこんなふうに生まれたんだろ」と自分を責め続けました。フィリピンに行けば「日本へ帰れ」と言われ、日本では「フィリピンに帰れ」と言われる。では私は一体どこに帰ればいいのでしょうか。

そんな時、友だちの一言が私を救いました。「何で自分を嫌いになるの？アリアナはアリアナじゃん。」その言葉に涙が出ました。自分を否定していた心に、やさしい光が差し込んできたのです。私は初めて「自分のことを好きになってもいい」と思えました。

私は黒い髪も黒い目も持っています。日本人のようにも見えるし、英語やタガログ語、ピサヤ語も話せます。私の中には日本とフィリピン、両方の血が流れています。私は「一人で多様性を体現している存在」なのだと思ってきました。

これまで「血」を理由にからかわれたり傷つけられたりしました。でも考え方を変えれば、それは「多様性の証」です。一本の物差しで測れば「日本の血があるのに日本語が下手」と見なされる。でも多様な物差しで測れば、「日本とフィリピン、両方の文化を持っている。すごいね」と言えるはずです。私はその「物差し」を増やしていきたい。そうすれば、国籍や文化の違いに苦しんでいる人に「あなたはそのまま素晴らしい」と伝えることができます。

私は、高校生になったら漢字などの基礎的な学力をもっと身に付けて、将来就職したい会社があります。その会社では、様々な国の人が働いています。世界中の人と出会い、さまざまな文化を体に取り入れたいのです。もちろん「血」までは変えられません。でも、心の中に多くの文化を取り込み、たくさんの価値観を持つことはできます。私の体の中を巡っている、この「多様性の証」を誇りにし、いじめにあっている人や国籍で悩んでいる人の声を聴いてあげられる、そんな人間になりたいのです。

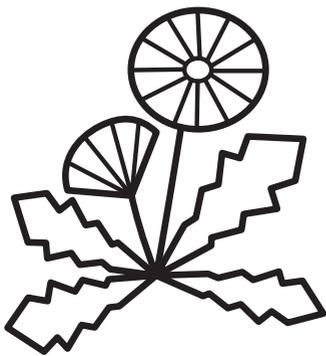
思えば、あの時私を救ったのも「一言の言葉」でした。「アリアナはアリアナじゃん」という何気ない言葉が、私の心を溶かしました。だから私も、誰かの心を照らす言葉を届けられる人間になりたいです。

人は生まれた国や肌の色で差別されるべきではありません。「日本人だから」「フィリピン人だから」「黒人だから」……そんな言葉は、人を分け隔てる刃にしかありません。みんな同

じ人間です。違いは「劣っていること」ではなく「豊かさ」なのだと、私は自分の体験を通して知りました。

どうか、あなたも思い出してください。あなたの隣にいる人が、国籍や文化の違いで悩んでいるかもしれませんが、からかうのではなく、「そのままがいい」と認めてあげてください。その優しさが、誰かの生きる力になります。

私はもう、「この国から出ていけ」という言葉に負けません。なぜなら私は、この国で生きることを選び、ここで多様性を誇りにして生きていくと決めたからです。自分を嫌いだっただけの日に私に伝えたい。「生まれてきてよかった」と胸を張って言える未来は、必ずあるのだと。私の小さな一歩が、やがて社会を変える大きな力になることを信じています。



## 「沈黙」の中にある勇気と努力

津市立東橋内中学校 三年

田村 爽

「静寂の中、みんなの視線が矢のように私の顔に突き刺さる。私は何もしない。何もできない。ただ前に立っているだけ。」

私は、特定の場面で声が出なくなる「場面緘黙症」という症状を抱えています。場面緘黙症とは、ある特定の状況になると、強い不安から声が出せなくなる状態のことです。頭では話そうとしているのに、体がまるで動かないような感覚に陥るのです。それは、私にとって長年、静かに、しかし確実に存在してきた「壁」のようなものでした。

小学校に入って最初の自己紹介。私は黒板の前に立った瞬間、心臓の鼓動が全身に響き、頭が真っ白になりました。何も話せず、ただ立ち尽くす私を、先生がそっと助けてくれました。その時の悔しさ、恥ずかしさ、体中を支配する緊張感は今でも忘れられません。それが私と場

面緘黙症の出会いでした。

「発表、大嫌い！」それは正直な気持ちでした。でも、本当は違います。私は、人に自分の思いを伝えることが嫌いなわけではないのです。伝えたい。でも伝えられない。それが一番つらいのです。話したいのに話せない。気持ちはあっても、体が言うことを聞かない。この矛盾の中で、私はずっと苦しんできました。

そんな私を、先生方は見守ってくれました。無理に発言を求めず、別の形で参加させてくれました。友達も私の発表の順番になると、そばに立って代読してくれたり、サポートが必要か聞いてくれたりと、その場に応じて助けてくれました。その優しさに、何度も救われました。しかし、その優しさに甘えてはいけないと思う自分もいて、ずっと焦りを感じていました。

サッカーをしている時の私は、まるで別人のように自由でした。仲間と自然に声を掛け合い、プレーを楽ししむ自分がそこにいました。でも学校に戻れば、また緊張に飲み込まれてしまう。

「ちゃんとしなきゃ」「完璧にやらなきゃ」と思えば思うほど、自分を締め付けてしまうのです。

そんなある日、私は自分の中のもう一つの「壁」に気づきました。私は、同じように困難を抱えているクラスメイトを、心の中で見下していたのです。「あの人よりはまし」「自分はまだできています」そんな風に思うことで、何とか自分の弱さから目をそらそうとしていました。

発表が苦手な子を見て、仲の良い友達と目配せして笑ったこともありましたが、最低です。私は、他人を蔑むことで、自分を守っていたのです。

私の学校には、外国にルーツを持つ生徒や、ASDや知的障がいのある生徒がいます。日本語がうまく話せなかったり、文化になじめなかったり、それぞれが困難を抱えています。私はその子たちに「寄り添う」ふりをして、心の中では距離を置いていたのです。自分もまた「前で話せない」という苦しさを抱えているのに。

そんな自分が変わりたいと思ったきっかけは、「レジリエンス教育」の授業でした。ストレスや困難に直面しても、テニスボールのように跳ね返す「しなやかな強さ」を育てる学び。相手の言葉を前向きに言い換える「リフレーミング」、人をほめる、自分をほめる。そんな実践を通して、私は少しずつ、自分を肯定できるようになってきました。

今も、みんなの前で堂々と発表できるわけではありません。でも、発表に向けて準備してきた時間、勇気を出して一言でも声を出そうとした努力、それは決して無駄じゃない。今なら、そんな自分を「よく頑張ったね」と認めてあげられる気がします。

私はこれまで、自分が「できない」ことばかりに目を向けて、自信を失ってきました。でも、今は「できた」ことに目を向けて、自分を励ませるよう努力しています。そんな私の小さな一歩をちゃんと見てくれている人たちがいることが、何よりの支えです。

私のように、話せないことに悩んでいる人はきっと他にもいます。「話せない＝甘え」ではありません。本人は誰よりも苦しみ、努力しています。その苦しさに寄り添える人が、そばにいてくれるだけで、少し心が軽くなります。私も、誰かのそばで、支えられる存在になりたいと思っています。

あなたの周りにも、うまく話せない人がいるかもしれません。その人は、あなたと同じように、伝えたいことを胸に抱えています。ただ、その「声」が出せないだけなのです。どうか、その「沈黙」の中にある勇氣と努力に気づいてください。耳を傾けてください。見ようとしてください。私たち一人ひとりが、ほんの少し優しくなるだけで、世界はもつと生きやすくなるはずです。

私はこれからも、自分の「声」を取り戻すために一歩ずつ進んでいきます。そしていつか、心からの声で、「私はここにいる」と伝えられるようになりたいと思っています。



## ボランティア活動で知ったこと

伊賀市立崇広中学校 二年

井岡 雄大

僕は、今年の夏休みに、フィリピンのセブ島にあるスラムに行つて、ボランティア活動をしました。スラムというのは、とても貧しくて、電気や水道もうまく使えないような場所です。最初は緊張していたけど、実際に行つてみると、そこには元気な子どもたちや、やさしい人たちでいっぱいでした。

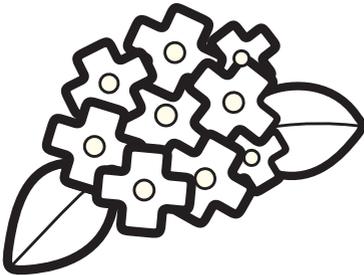
僕たちは、スラムに住む子どもたちと一緒に遊んだり、食べ物を配つたりしました。僕は正直、はじめはかわいそうだと思つていました。でもそれはちがつていることに気がつきました。そこに住んでいる子どもたちは、たしかに生活は大変そうだけど、いつも笑つていて、友達や家族を大切にしていました。特に、アミールくんという男の子と仲よくなりました。アミールくんは僕より少し年下で妹の面倒を見たり、お母さんの手伝いをしたりして、とてもがんばつ

ている子でした。一緒に遊んでいるときに、僕は将来の夢を聞きました。するとアミールくんは少しさびしそうな顔をしてまだ夢を見ていないと言っていました。理由を聞くと、学校に行けないし、家事もあるからということでした。それを聞いて、僕は、毎日ふつうに学校に行つて好きなことをしたり、夢をもっているのに、それができない人がいることを知り、不公平だなと思いました。そのとき僕は、誰もがもっている平等な権利、「人権」について考えました。ごはんを食べたり、安全に暮らしたり、学校に行つたり、夢をもつたりするのも人権の一つです。でもスラムに住んでいる人は、その当たり前の人権が守られていない人がたくさんいました。それはすごくおかしいことだと思いました。日本に帰つてきたとき、僕は自分の日常がどれだけ恵まれていたかを実感しました。毎日、きれいな教室で勉強ができて、給食も食べられ、安全に眠れる。そんな当たり前が、当たり前じゃない世界があるということをもつと多くの人に知ってもらいたいと思いました。もう一つ忘れられない出会いがあります。マリアちゃんという女の子でまだ十歳くらいです。彼女は学校に行くときも、小さな弟を背中におぶつていると言っていました。「なぜ、弟を連れてきてるの？」と聞くと、「お母さんがごはんをつくっている間、私が面倒を見るの」と答えました。小さな体で一生けんめいに弟の世話をしながら、授業も受けていて、本当にすごいなと思いました。マリアちゃんは「私、本当は毎日学校に行きたいけど、家の手伝いがあるから週に二回しか学校に行くことができないの」と言つ

ていました。僕はそのとき、心が苦しくなりました。僕が日本で「今日はめんどうくさいから学校を休みたいな」と思っているとき、世界のどこかでは、こんなに頑張っている子がいるんだと思ったからです。スラムの人たちとすごした中で、改めて、スラムの人の当たり前と自分の当たり前が全然違うということを感じました。この体験をしたからといって、僕にいきなり世界を変えることはできません。でも、だからこそ、まずは身のまわりのことから始めていこうと思います。例えば、学校で国際問題について学んだときや、ニュースで世界のことを見たとき、「自分には関係ない」と思わないで、「自分だったらどう思うかな」と想像すること。

小さなことかも知れないけど、それが人を思いやる一歩だと思います。まずは、身近なことから考えようと思いました。自分には関係ないとは思わずに、スラムであったアミールくんとマリちゃんのことを大切に、これから生きていこうと思いました。そして、自分のもっている当たり前前の生活や権利を、もう一度見直すことも大事だと思いました。水道からきれいな水が出ること、毎日ごはんが食べられること、安心して眠れる家があること、そして学校に行くことができること。それらはすべて、決して当たり前ではないことなのです。世界には今この瞬間にも、それらが手に入らない人たちが大勢います。スラム街で出会った子どもたちは、何も持っていないように見えて、実はそうではなく、僕たちにも必要な心の豊かさをしっかりと持っていました。そして、彼らは、感謝すること、希望を持つこと、人と人のつながりを大切に

することなど、大事なことをたくさん教えてくれました。これから僕は、もっとまわりの人にやさしくしたいし、世界で困っている人たちのこともちゃんと知っていききたいです。そして、僕にもできることがあれば、少しずつでも行動していきたいと思います。また、これからも世界のことや自分の周りのことについて考え続けていきたいです。



〇三重県大会 優秀賞（NHK津放送局長賞）

## 私の事

松阪市立殿町中学校 三年

森 川 陽 月

私には自閉症スペクトラム障害（ASD）という発達障害があります。ASDと聞いてすぐにそれが何か分かる人はあまりいないと思います。ASDとは、人とのコミュニケーションや行動に苦手さがあり、幼少期から認められる脳の働き方に違いがある状態のことです。私の場合は、急な予定の変更があるとパニックになってしまったり、聴覚過敏があるので、教室で突然大きな声や音が出るとドキドキしてしまい心が疲れきってしまいます。このようなことから、クラスや学校のみんな、周囲の大人の人と同じペースで動くことが難しいです。それでも中学生としてきちんとしなければと思って、自分なりにかなりのエネルギーを使ってがんばっています。

私の特性であるASDは見た目には分かりません。なので、みんなからは大人しくて、のん

びりマイペースな子だと思われることが多いです。のんびりマイペースというよりも実は、毎日周りのいろんなものに刺激を受けて心も体も疲れきって頭の中がぼんやりしているのです。かなりがんばって中学校生活を送っているのですが、それを分かってもらえないのが辛く、大変です。

私がASDであることは、両親と一部の学校の先生しか知りません。ですが、最近自分がASDであることを周りに打ち明けるべきかどうかを考えるようになりました。打ち明けることで、楽になったり、助けてもらったり、授業を休むⅡ怠けていると思われなくてすむかも思いうのです。しかし、同時に打ち明ける怖さもあります。

まず、打ち明けるメリットを考えてみました。私の苦手なことを知ってもらえば、配慮してもらえるかもしれません。例えば、予定を早めに教えてもらったり、体が辛くて授業中にうすぐまっしてしまいそうになった時は、保健室に連れて行ってもらえるかもしれません。他にも大きな音や声が出る時はイヤーマフを使っても変な目で見られないと思います。そうすれば、今より安心して学校生活を送れるかもしれません。また、打ち明けることで怠けているわけじゃないということを理解してもらえと思います。学校を時々休まなければいけないことも、日々の学校生活をみんなと同じように送ることに相当努力していることも、性格ではなく私の特性として受けとめてもらえるのは、とても安心できることです。そして、私のことを知った友

達や先生がASDについて学んでくれるかもしれません。同じようにASDや、それ以外の発達障害で苦しい思いをしている子にもみんなが優しい目を持って行動してくれるかもしれません。

ですが、デメリットもあります。それはASDだと打ち明けても理解してくれる人ばかりではないことです。特別扱いだとか、障害という言葉がついているので怖いと言う人もいるかもしれません。実際にネットやニュースで発達障害の人に対して心ない言葉が投げかけられているのを見たことがあります。そういった言葉が私に向けられたら、本当に心に深い傷がついてしまうと思います。それから、一度打ち明けたら私には発達障害の人という名前以外の名札が付きます。普通にうまくできたことまで、障害があるのにすごいとか、逆に失敗したりすると、やっぱり障害があるからねと思われたりするのではないかと不安です。

だから私は、自分にASDという特性があることを誰に、いつどんなふうに打ち明ければいいのかずっと悩んでいます。

今の私に分かっていることは、発達障害の人でもそうでない人でも、みんな違ってみんな良いということ。私の両親が、特性は障害の有無にかかわらず、みんなにあるもので、強みにもなると教えてくれました。確かに私は、大好きなゲームの話をする時は細かい設定や攻略方法を友達に分かりやすく説明することができます。かなり詳しく調べることも出来るので、

同じゲームをしている友達に頼りにされています。集中できる何かが見つかると、とても細かいところまで気付けるのは私の特性であり、強みだと思っています。

発達障害があってもなくても、その人らしさが大切にされること、それも人権ではないでしょうか。発達障害を打ち明けるかどうかはこれからも私の悩みではあると思いますが、社会がもっと理解や配慮にあふれていたら、私は迷わず自分のことを話せると思います。この先も私はASDと一緒に生きていく訳ですが、私が安心して、「私はASDです。」と言える社会になることを願っています。



## 病気

伊勢市立五十鈴中学校 一年

### 氏名非公表

私の腕には小さな痕がある。その痕は幼稚園の年長の時についたものだ。

その日、私はいつものように家で過ごしていた。母が私の額を触って、「ちよつと熱くない？」と聞いてきた。「大丈夫。」と、私は答えたが、心配した母は念のために私を病院に連れて行って、検査を受けることとなった。でも、その時母はただの風邪だと思っていて、薬をもらって家に帰り、安静にしていた。ところが夕方頃に病院から電話があり、大きな病院を受診し、入院となった。そして翌日には病名が伝えられた。「急性骨髄性白血病」という、簡単には治らない病気だ。私はあまりに急なことだったので、正直「どうなるんだろう…。」と思うほかなかった。

そして翌日、今度は治療のできるさらに大きな病院に行くこととなった。その病院は、もの

すごく大きく、部屋も大きかった。その日の午後には早速投薬治療が始まり、そこから半年間入院生活が続いた。

そんなある日、小学一年生の兄が会いに来てくれた。兄の表情には「驚き」と「心配」が入り混じっていた。その頃、まだ小さかった兄でも事の大きさには気づいていたように思う。兄の姿を見るだけで私は少し安心した。しかし、その後移動した新しい部屋では、外に出歩くこともできなかつた。兄に触れ合うことも、一緒に会うこともできなくなつた。触れ合うことができるのは両親だけで、父が私の看病をしてくれ、母は毎週土曜日に会いに来て泊まつてくれた。だが、私は寂しかった。見せてもらった母の携帯電話の画面には、まだ赤ん坊の弟と一緒に遊んでいる兄の姿が映っていた。弟と会うのを楽しみにしていた私は、それを見て涙が止まらなかつた。

葉のせいだろうか、髪の毛が少しずつ抜けていった。手で頭を搔くと、二、三本ぐらいの髪の毛が指に巻き付く。一週間、二週間と時間が経つと、頭には髪の毛が数本あるだけだつた。私はそんな自分の姿が嫌いだった。ご飯もあまり食べられない、髪の毛もほとんどない、家族とも一緒にいられない、そんな生活も自分も嫌いだった。だけど、その病院には私と同じように髪の毛のない子もいた。私はその子とよく遊んだ。それに、病院の医師や看護師もみんな私を励ましてくれて、そのおかげで徐々に元気を取り戻していった。私は保育園の卒園式も、小

学校の入学式にも出られなかったが、病気は少しずつ治ってきて、元気を取り戻すことができた。早く友達に会いたい：そんな思いを何日も、何か月も思い続けてきて、とうとう退院の日が近づいてきた。私は病気に勝つたのだ。そして、点滴で心臓までつながる長い管を取り除いた。それが今も残る腕の痕となっている。嬉しかった。五月に退院し、久しぶりに外の空気を全身に浴びてすごくさっぱりして快感だった。

そして、家で静養してから九月に小学校へ登校することとなった。私は緊張していた。なんだって、頭にはまだ髪の毛がないのだから。みんなはこんな自分を受け止めてくれるだろうか？仲間に入れてくれるのだろうか？そんな思いが頭をよぎった。厚めの帽子をかぶって私は学校に行った。みんなは私の髪の毛がないことを知らない。しばらくの間私はその帽子をずっとかぶっていた。でも、いつかは仲良くなった友達に見せたい。それをとって他の子に見せることができたのは兄のおかげ。兄は二年生で二階の教室なのに、わざわざ一年生の一階の教室まで来てくれて「帽子、外したら？仲良いんだろ？」と優しく声をかけてくれた。帽子を外した私に最初は驚いていた友達も、すぐに受け止めてくれた。他のみんなも私を仲間に入れてくれた。私は涙が出るほどうれしかった。

この経験を通して、二つのことを学んだ。

一つめは「命の大切さ。」命はいくつもあるわけではない。一人一つ限りの大事なものだ。

学校の入学式にも出られなかったが、病気は少しずつ治ってきて、元気を取り戻すことができた。早く友達に会いたい：そんな思いを何日も、何か月も思い続けてきて、とうとう退院の日が近づいてきた。私は病気に勝つたのだ。そして、点滴で心臓までつながる長い管を取り除いた。それが今も残る腕の痕となっている。嬉しかった。五月に退院し、久しぶりに外の空気を全身に浴びてすごくさっぱりして快感だった。

そして、家で静養してから九月に小学校へ登校することとなった。私は緊張していた。なんだって、頭にはまだ髪の毛がないのだから。みんなはこんな自分を受け止めてくれるだろうか？仲間に入れてくれるのだろうか？そんな思いが頭をよぎった。厚めの帽子をかぶって私は学校に行った。みんなは私の髪の毛がないことを知らない。しばらくの間私はその帽子をずっとかぶっていた。でも、いつかは仲良くなった友達に見せたい。それをとって他の子に見せることができたのは兄のおかげ。兄は二年生で二階の教室なのに、わざわざ一年生の一階の教室まで来てくれて「帽子、外したら？仲良いんだろ？」と優しく声をかけてくれた。帽子を外した私に最初は驚いていた友達も、すぐに受け止めてくれた。他のみんなも私を仲間に入れてくれた。私は涙が出るほどうれしかった。

この経験を通して、二つのことを学んだ。

一つめは「命の大切さ。」命はいくつもあるわけではない。一人一つ限りの大事なものだ。

○三重県大会 優秀賞（三重テレビ放送賞）

## 寄り添う心

津市立橋北中学校 二年

栢原 咲羽

人権とは、少し難しい問題に聞こえてしまうけれど、命を大切に、個人を大切にすると  
いう二つで基本的なことは解決するのではないかと思います。よく「障がい者の気持ちに寄り  
添って」ということがあります。それは乱暴な考え方のように感じてしまいます。

今から、私と母が身体の不自由な方に寄り添ってもらった日の事について書こうと思います。

春が近づいてきた頃、私は母と東京へ遊びに行きました。大きな交差点での信号待ちで三十  
人くらいが待っていたと思います。信号が青になると、みんな足早に歩きだしました。私と母  
は最後尾でした。その時

「すみません」

と呼び止められる声が聞こえました。辺りを見ると、盲導犬とおじさんが歩道の隅で立ち止ま

っていました。私たち以外に止まる人はいませんでした。

「どうしましたか？」

と近づき、声をかけました。おじさんは目が不自由な様子で、こう言った。

「地下鉄日比谷線に乗りたいのですが、この辺りのはずがよくわからなくなってしまつて…。」  
おじさんの隣にびたりと盲導犬が寄り添っていました。気のせいか、盲導犬も困っている様に見えた。母は地下鉄の入り口を確認すると

「入口まで一緒に行きましょう」

と言いました。おじさんは安心した様子で母の腕に掴まり、歩き出しました。歩いている間は沈黙となつてしまい、私はどんな話をしたらいいのだろうと悩みました。母が

「桜がまだ咲きませんね」

と、よくある世間話を始めた。しかし目の不自由な人に桜の話をしたことに母は、しまったという顔をして

「すみません！私…ごめんなさい」

と謝った。するとおじさんは

「いえ、まったく気にしないでください。私も桜は楽しみです」

と、優しい笑顔で言ってくれました。いまだ気まずそうにしている母に気づいたおじさんは、

母に

「女性は春のお洒落をするのが楽しみじゃないですか？ 早く春服が着られるといいですね」と笑顔で言ってくれました。まさか、目の不自由な方から春服のお洒落の話をされるなんて思ってもみず、母は笑いながら

「春服は早く着たいんですけどね、あいにく私ちよつと太ってしまって、冬服は体を隠せて丁度いいんですよ」

と言い、おじさんと笑い合っていました。

地下鉄の入り口に到着すると、長い階段が見えたので、母はエレベーターを探しました。しかしおじさんは

「ここまで大丈夫です。地下鉄は慣れていきますので。助かりました」

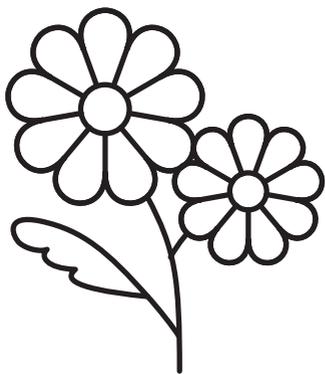
と言つて、軽やかに階段を下って行きました。そうは言つても心配で私たちは、しばらくおじさんを黙つて見送つていると、おじさんと盲導犬は途中で立ち止まり、地上にいる私と母の方を振り向き、手を振つて言いました。

「本当に大丈夫ですよ。ありがとうございます」

どうして私たちがずっと見ていたのがわかったのだろう。母と私は思わず手を振り返して返事をしました。そして、なんてステキな方なんだろう…と思いました。

確実に、目の不自由なおじさんのほうが私たちに寄り添ってくれていたと感じました。おじさんは、私たちに気をつかわせないように考えてくれていたんだと温かい気持ちになりました。

健常者が障がい者を助ける、寄り添うという考えではなく、人は皆助け合って共に社会を生きているのだ。相手の立場になって尊重し合うことが大切だ。健常者か障がい者かという事はまったく問題ではない。人と人なのだ。



## エレベーター前での経験から考えたこと

川越町立川越中学校 三年

川村 佑里花

以前、デパートの高い階に行くためにエレベーターを待つていた時のことです。その日はデパートがとても混んでいて、エレベーターの前にも、エレベーターを待つ人たちの行列ができていました。私の前に車いすの男性が並んでいて、その男性の前には小学校低学年くらいの女の子と、その子の母親らしい女性が並んでいました。エレベーターが着き、乗り込む時に、女性が車いすの男性に「お先にどうぞ」と言い、男性は無言で、おじぎもせず、エレベーターに乗りました。そこでエレベーターはちようど満員になったので、ドアが閉まり、上に昇って行きました。その後男の子は女性にこう言いました。

「なんで僕の方が先やったのに、あのおじさんに『どうぞ』したん？ずるい、乗れんかった。」  
女性はこう答えていました。

「そう決まってるんよ。かわいそうで大変なんやから。」

私は、女性がエレベーターの順番を車いすの男性に譲ったのは良いことだけれど、二つのことが気にかかりました。一つは、女性から男の子への答えです。もう一つは、男性がお礼を言わなかったことです。

一つ目について、もし私が女性の立場だったら、自分の子供に何と答えるか、どうやって説明するだろうかと考えてみました。

男の子の言う通り、基本のルールだと「列に並んでいる順番にエレベーターに乗る」ほうが正しいです。でも、車いすに乗っている人は、立っている人よりも広いスペースが必要です。基本のルール通り、健常者がどんどんエレベーターに乗ってしまうと、車いすの人はいつまでもたってもエレベーターに乗れない、ということになるかもしれません。あの女性も、自分たちが乗ってしまうと残りのスペースには車いすが入らなくなるので、男性に先を譲ったのでしょう。さらに、車いすの人は、別の階に行こうと思ったとき、エレベーターしか選択肢がありません。健常者ならエスカレーターや階段を使うこともできますが、車いすの人には使えないからです。

もし私が女性の立場だったら、自分の子供に、そういった違いを説明した上で、「だから、車いすの人に順番を譲るのがルールになっているし、思いやりなんだよ」と伝えると思います。

あの時、女性が車いすの男性に順番を譲らなかつたら、私もあのエレベーターに乗れていて、次まで待たなくて済んだでしょう。でも私は「ずるい」とは思いませんでした。それは、両親や祖父母が、私が小さい頃から、思いやりやルールについてきちんと言明してくれたからだと思えます。

二つ目の、車いすの男性がお礼を言わなかつたことについて、私はとてもやややしていません。女性は自分の意思でエレベーターの順番を譲つたのだし、車いすの人への思いやりや気配りも当然のことだから、男性が「ありがとう」と言う必要はない、そういう意見もあるかもしれません。しかし、相手が自分のために何かをしてくれたり、親切にしてくれたときにお礼を言うのは、人として当たり前のことだと思えます。それに、「ありがとう」と一言伝えることで、お互いが気持ちよく過ごせます。毎日の生活でも、朝弁当を作ってくれた母に「ありがとう。いってきます」と言っておかけたり、休み時間に授業で分からなかつたところを教えてくれた友達にお礼を言つたり、そうすることで信頼関係も作つていっていると思えます。

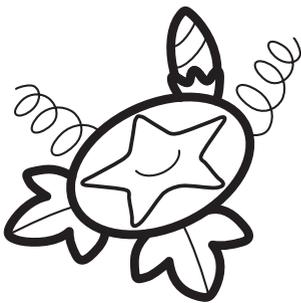
このような気持ちを母に話したら、

「もしかしたら、その車いすの男の人は、話すのが不自由だつたり、上半身が動かなくておじぎがでなかつたり、何か事情があつたのかもしれないよ。」

と言われました。私にはない発想で、そういう可能性もあるのかと思いました。世の中には色

々な事情や特性を持つ人がいて、ぱっと見ただけでは分からないこともあります。そういった、様々な可能性を考えずに、自分の体や健康状態が他の人にも当然あてはまると思つて、「お礼も言わないなんて」などと考えてしまうのは、とても危険なことだと思いました。

私は、子供はなぜ勉強しなければならないのだろう、義務教育は何のためにあるのだろう、とよく考えてきました。今まで結論が出なかつたのですが、もしかしたら、人を思いやったり、人の様々な可能性を考えるために勉強が必要なのかもしれないと思ひました。人を思いやったり、様々な可能性を考えるためには、知識や情報が必要です。それがないと、相手の状況を想像することもできないからです。色々な人たちと一緒に生きていくために、これからも勉強していかなければならないと思ひました。



## 誰もが過ごしやすい社会へ

津市立東橋内中学校 二年

オオニシ イズミ

私はポリビア国籍の外国人です。しかし、日本で生まれ育ちました。私は日本が大好きです。日本の文化、自然、歴史、全てを気に入っています。日本は安全で、強盗などの心配もありません。でも、暮らしていて不安に感じる時もあります。それは、人々の接し方によるものです。

私が中学一年生の時のことです。母と当時中二だった兄と私は、A T Mで支払いをするためコンビニに行きました。方法がわからなかった母は、つたない日本語で店員に尋ねました。すると、店員は嫌悪感を露わにしながら「何？」、「どうするの？」と、失礼な言葉で母に対応してきました。私は言葉を失いました。店員の態度からは、母の言葉を理解しようとする気持ちがかく感じられず、私たちが外国人であることを理由に差別しているように見えました。店員の冷たい態度を見て、兄が母に変わって店員に話しかけました。日本で生まれ育った私や兄は、

母よりも日本語を上手に話すことができるのです。店員は、兄が日本語が堪能であることに気づき、話し方を少しだけ丁寧に変えました。結局、そのコンビニでは支払いができないと言われ、私たちは店を後にしました。

日本語が上手く話せないことは悪いことなのか。外国人は日本社会に邪魔な存在なのか。助け合うことや思いやりを持つて接することは、日本人同士でしかできないことなのか。頭の中が疑問でいっぱいになりました。それと同時に、私も日本語が堪能なのに、何もできなかったことが申し訳なくなりました。私が動き出せなかったのは、外国人差別に対する恐怖があったからです。この一件までも、私たち家族は何度か外出先で少し冷たい対応をされたことがありました。幼い頃はその理由を考えたことがなかったけれど、小学六年生の頃には「外国人だから差別されているのでは？」と疑問を持つようになっていました。この一件で、その疑問が確証に変わったのです。私は家を出るのが怖くなりました。外国人というだけで、外ではどんな扱いを受けることになるのか。もしかしたら自分も差別を受けることがあるのかもしれないと思うと、怖くてたまりませんでした。

私は、この経験をしばらく誰にも相談できずにいました。はじめて人に伝えたのは、中学一年生の終わりごろです。人権学習の内容に、この経験と重なるころがあったので、学習後の振り返り用紙に、経験したことと自分の気持ちを書きました。すると、学年の先生から「この

問題を、クラスみんなと一緒に考えたい。」と頼まれ、次の人権学習の題材の一つにしてもらうことになりました。クラスのみんなに話してもらったとき、最初は「それは差別ではない。」「母を助けなかったあなたはダメ。」などと、否定されるかもしれないと不安でした。しかし、私の気持ちをたくさんの友人が理解し「そんな風に差別で苦しむ人がいない社会にしたい。」と、共に考えてくれました。クラスの友達の想いを知り、私は安心しました。私はコンビ二での出来事以来外に出るのが怖くなりましたが、学校に来ることに不安は全くありません。それは、私が悩んだときや不安になったときに、支えたり、助けたりしてくれる人たちがいるからです。そんな仲間がいると人は強くなれるということを知ることができました。

中学二年生になり、学年の取り組みである職場体験へ行く日が近づいてきました。私は外国籍の友達と二人で、市内のスポーツ用品店へ行くことになっていました。一緒に行く友達は来日してからの日が浅く、日本語を上手に話せません。体験の前日は、事業所の人たちが私たちをどのように扱うのか怖かったし「日本語ができる私が友達を助けないと。」というプレッシャーも感じ、あまり眠れませんでした。けれど、体験先の事業所の方は、私たちが外国人だからと特別視したり、甘やかしたり、見下したりすることはなく、平等に接してくれました。そして何より「外国人だからできないんじゃない、やるんだよ。出来るんだよ。」と、私たちを信頼してたくさんの仕事を任せてくれたことが嬉しかったです。職場体験に行つてから、外国

人差別に対する不安が少し減りました。

差別をなくすために、自分の想いをたくさんの人に知ってもらいたい。そんな思いから、私はこの作文を書きました。外国人を不平等に扱うのは間違っています。日本語を流暢に話せるかどうかや、肌の色が何色かは、優劣をつける理由になりませんか？障害の有無や性別、どこで生まれ育ったかどうかで差別することは間違っていますか？私は差別を許すことはできません。この作文を読み、自分のこれまでの行動を振り返ってほしいです。人はみんな平等で、助け合い生きていくものです。全ての人のとって過ごしやすい社会が少しでも早く実現することを願います。私はこれからも自分の考えを発信し続けていきます。



## 私の弟

四日市市立山手中学校 三年

石 崎 和 貴

私は、三人兄弟の長男だ。五つ離れた弟と八つ離れた弟がいる。一番下の弟は、今年の四月に小学生になったばかりだ。しかし、少しばかり普通ではなかった。

弟は、生まれた時から身体が大きく、ほとんど風邪もひかない健康が自慢だった。歳も離れていたし、二人目の弟だったから、面倒を見たりもしていた。いつも見ていたから、言葉がなくても何をしてほしいのか分かったし、泣き出す前にどうにかしようとした。

ある日、三歳児検診から戻ってきた両親が少しだけ深刻そうだった。どうやら、発達に問題があるそうで、簡単な検査をして療育を勧められたらしい。療育とは、発達に課題のある子どもに対して、個々の発達の状態や特性に応じて、今ある困りごとを解決していけるようサポートしてもらえる支援だ。長期的には、将来における自立と社会参加をめざすものである。

思い返してみれば、弟はほとんど喋らなかつた。したいこと、してほしいことがあると手を引つ張つて、指差して伝えようとすることが多かつた。抱っこしてほしい時も目の前に来て、両手を広げていた。機嫌が悪いときは、大泣きして、家族を叩いたり、地面に寝転んで抵抗したりすることもあつた。私は正直言つて、すぐ下の弟のおしゃべりがひどく、うるさいなあと思つていたから、喋らない方が静かで良いとさえ思つていた。機嫌さえ損なわれないようにすれば、うるさくてイライラすることもなかつたからだ。

両親の決断は早く、すぐに療育に通えるよう手続きを進めていた。弟は四歳になる少し前の四月から週五日、朝から夕方まで母親と一緒に療育に通い始めた。私とすぐ下の弟は、学校から帰るとランドセルに付けた鍵で玄関を開け、母と弟の帰りを待つようになった。

新型コロナウイルスの影響もあつて、療育施設へ実際に行ったことは無かつたが、夕飯時にどんなことをしているか話を聞くことは多かつた。普通の幼稚園や保育園のように、ただ遊んでいる様子にしかな思えなかつたが、体幹を鍛えるような運動機能のトレーニング、順番を守るような社会性、五感に働きかけて感覚刺激を養うなど複合的な意図があり、遊びの中で身につくよう綿密に計画立てられて毎月プログラムが組まれていたようだ。

もちろん、順調だつたわけではない。人見知りや場所見知り、療育の先生や友達にも馴染めず、駐車場で二時間近く動けないことも半年程続いたし、施設内に入れても自分の教室には

入れなく、砂場で過ごす等とても大変だったらしい。給食も部屋から脱走するので、全ての出入口の鍵を閉めて、なんとか一口だけでも食べさせる毎日だったそうだ。

それでも、一年間しつかり療育に通い、公立幼稚園に入園することになった。年長になると、担任の先生と相性が良かったようで、できることが増えてきた。少しずつ話もできるようになったことで友達とも一緒に遊べるようになって、嫌なことにも挑戦していった。運動会や発表会でも堂々と演技をして、私から見てもはつきりと成長がわかるほどだった。

小学校に入学するにあたり、特別支援学級への就学が決まった。私も幼稚園から支援が必要な同級生と過ごしていたので、それほど特別感を感じることはなかった。でも、支援が必要ということの重要性は、より理解できてきていると思う。生まれた時から一緒にいるといつまでも赤ちゃんのように、できなくても当たり前で手伝わないとできないものだと思ってしまう。けれど、小学校に入れば、当たり前のように漢字を覚え、足し算引き算できると思っていたが、弟はできなかった。かろうじて、席に座っていると自分の名前を書けるようになったが、様々なことにおいて先生や親の支援がないと学校へ通えないのだ。

私は今年受験生だ。入学試験に合格しないと高校へ進学できない。弟はどうだろう。受験勉強できるのだろうか。高校へ進学できるのだろうか。就職はどうだろうか。

当事者になって初めて考える。周りから見たら大したことない困りごとは、本人や家族にと

って本当に困っていることなのだ。いつかみんなに追いついて同じように進学して、就職して、自立して生きていくという日は来ないのだ。必ず支援が必要なことから。だけれど、人一倍頑張って、何かに頼りながらも将来の自立に向かって努力していることは、誰とも変わらな  
い。普通とか普通じゃないとかは、関係ない。人よりも何倍もゆつくりだけど成長し続ける弟  
にとって、その努力を認め、応援し、一緒に過ごすことで、将来の手本となるよう頑張る姿を  
見せるのが私の役目だと思う。そして、自然に助け合える社会であってほしいと願う。



《奨励賞》(九編・順不同)

題名	学校名	学年	氏名
伝える勇氣	伊勢市立小俣中学校	二年	田中敬史
透明な差別	伊勢市立小俣中学校	三年	林結月
私はきょうだい児	川越町立川越中学校	一年	伊藤真理彩
弟について	東員町立東員第二中学校	二年	嶋田海夢
多文化共生の学習から考えたこと	伊賀市立柘植中学校	二年	谷口愛結
高齢者と私たち	明和町立明和中学校	三年	森田美咲
唯一無二の個性	非公表	一年	非公表
曇りのち晴れ	御浜町立御浜中学校	一年	赤阪杏
「普通」とは何？	紀宝町立相野谷中学校	三年	門田麻央

# 第44回全国中学生人権作文コンテスト 三重県大会表彰式



人権を大切にする  
人KENまもる君







いじめられている…



インターネット上の  
トラブルに  
巻き込まれた…



学校や家族、宗教、  
その他のことで  
悩みがある…



大塚イメージキャラクター  
人KENまもる君

なや  
**悩みがあったら**  
そう だん  
**相談してね!**



大塚イメージキャラクター  
人KENあゆみちゃん

秘密は守るよ!

法務局で相談を  
受け付けています!



電話で相談

通話無料



子どもの人権 **110番**

フリーダイヤル 0120-007-110

**0120-007-110**

相談時間

月曜日～金曜日 午前8:30～午後5:15

LINEで相談



LINEじんけん相談



▶ 友だち追加して相談してね!

ミニモニターで相談



SOSミニモニターでも相談できるよ!  
すぐにほしい人は、  
0120-007-110 に電話してね!!

メールで相談

インターネットでも相談を受け付けているよ!

子どもの人権  
SOS-eメール

こちらからも  
アクセス  
できるよ▶



法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会

110-007-110

## 人権啓発キャッチコピー ～「誰か」のことじゃない。～

法務局と人権擁護委員は国民の皆さん一人一人の人権意識を高め、人権への理解を深められるように様々な人権啓発活動を行っています。



## 人権相談キャッチコピー ～なんでもおしえて ところのもやもや～

法務局と人権擁護委員は、人権侵害による被害を受けた方を救済する活動を行っています。

人権教室の申込みや人権相談に関するお問合せはお近くの法務局までご連絡ください。

津地方法務局人権擁護課  
津地方法務局四日市支局  
津地方法務局伊勢支局  
津地方法務局松阪支局  
津地方法務局桑名支局  
津地方法務局伊賀支局  
津地方法務局熊野支局

連絡先はこちら  
津地方法務局ホームページ



<無断転載を禁じます>

本作文集の作品を地方自治体が広報誌に掲載される、あるいは学校が教材等に使用される等の場合には、あらかじめ下記に御連絡ください。

**津地方法務局人権擁護課 TEL 059-228-4193**

〒514-8503 津市丸之内26番8号 (津合同庁舎)



人権イメージキャラクター  
人KENまもる君



人権イメージキャラクター  
人KENあゆみちゃん

